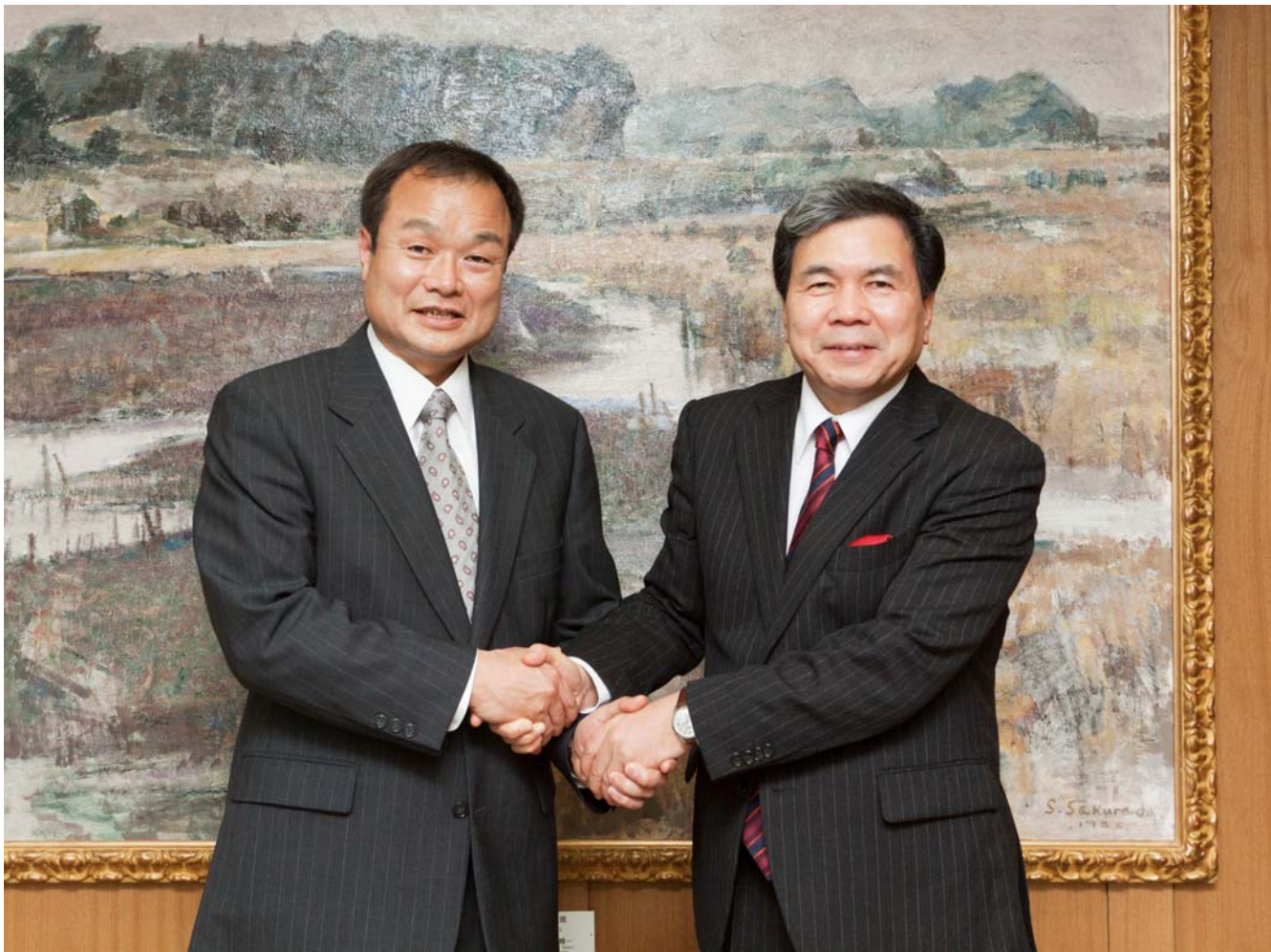


◎対談

モビリティ社会の未来像

環境と安全の観点からパーソナルモビリティの未来を考える


伊東孝紳 本田技研工業株式会社社長

蒲島郁夫 熊本県知事

モビリティ社会は環境問題や高齢化など、これまで以上に困難な課題に直面している。特に、公共交通が十分整備されていない地方では、個人の移動を支えるクルマやバイクなどのパーソナルモビリティの確保が、これからますます重要になってくる。新しい時代にふさわしいモビリティ社会を、どう築いていくべきか、蒲島郁夫・熊本県知事と、伊東孝紳・本田技研工業(株)社長に語り合っていた。


 Hondaの交通安全情報紙
The Safety Japan
 Since 1971

 2*3
 2011
 FEBRUARY・MARCH

●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
 〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
 TEL 03(5412)1736
 http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
 ●編集人：千葉英雄
 ※年間購読をご希望の方は、下記までお問合わせください。
 (株)アストクワイエティブ 安全運転普及本部係
 TEL 03(5439)1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

 SJ-Netは
CONTENTS

対談
モビリティ社会の未来像……①
 危険予測トレーニング(KYT)/交差点の左折時(四輪車)……④
 交通安全指導「知っ得」情報
 一般道路と高速道路での後部座席シートベルト着用率……④
 SJクイズ……④
 DOCUMENT EYE ④
 車両の右左折時のウィンカーの点灯タイミングを観察する……⑤
 地域の子カラ/伊豆スカイライン・ライダー事故・ゼロ作戦……⑥
 現場訪問/中部電力(株)三重支店……⑦
 TOPICS ①/「社内のできる安全運転指導セミナー」inもてぎ……⑦
 TOPICS ②/さつき会・七日会・インストラクターキックオフ式典
 NEWS REVIEW/2010年Honda安全運転普及本部 年末ご挨拶会……⑦
 教育最前線/沖縄県立沖縄水産高等学校・二輪車安全運転教室……⑧
 読者の声……⑧

伊東 今回の実証実験では、実際の都市交通環境下において、二輪車・四輪車・汎用製品の電動化技術や情報通信技術、太陽光発電によるエネルギー供給などを用いた総合的なアプローチにより、将来のパーソナルモビリティのあり方やCO₂削減効果の検証を行います。私たちは

熊本県で始まった パーソナルモビリティの 実証実験

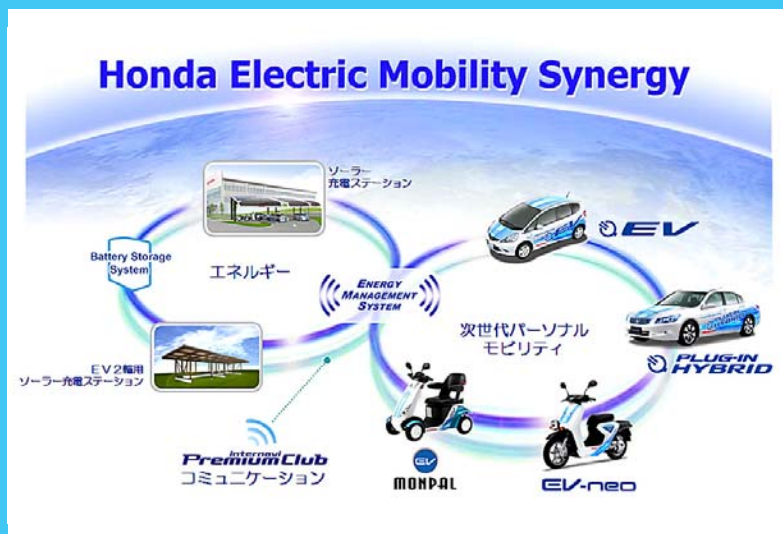
伊東 こちらこそ、よろしく申し上げます。ホンダの創業者である本田宗一郎には、関東以外の地域にも製造業を定着させたいという想いがありました。その一環として、熊本県には二輪車の生産拠点として熊本製作所を置かせていただいています。蒲島さんがおっしゃる通り、食べ物もおいしく、とても暮らしやすい。このように豊かな環境のもとで事業展開をさせていただき、私たちもありがたく思っています。

昨年8月、ホンダと「次世代パーソナルモビリティの実証実験に関する包括協定」(6面参照)を締結し、これからますます協力関係を深め、大きな成果をあげられることを期待しています。

熊本 熊本まで、ようこそおいでくださいました。最初に熊本県の魅力について、あらためて紹介させていただきます。
 熊本の魅力は3つあります。1つは「食」で、これを支えているのは「水」です。本県は日本有数の名水の産地で、熊本市の水道も地下水です。そのため水道の蛇口をひねれば、ミネラルウォーターが出てきます。その水で育まれた食べ物も、とてもおいしいわけです。2つ目は、阿蘇や天草に代表される自然。とりわけ阿蘇の景観は素晴らしいので、ぜひ伊東さんにはバイクに乗って阿蘇周辺をツーリングしていただきたいと思っています。3つ目は、加藤家・細川家の400年の歴史と文化です。加藤清正といえば熊本城、細川家といえば水前寺公園、また細川コレクションと呼ばれる細川家の至宝なども、きちんと保存されており、これも私たちが、今後も守り継いでいかなければならないものです。

豊かな自然と文化に 育まれた熊本県

「移動する喜び」と「持続可能な社会」の両立をめざしています。パーソナルモビリティの環境技術の向上はもはや必須ですから、それに加えて、もっとホンタらしい提案をしていかないとけない。そういう意味で昨年10月に、熊本でまず電動カート「モンバル」から実証実験が始まったというのは幸せなことだと感じています。これは、いかに高齢者の方々に不自由なく、便利で安全快適に移動していただくか、まさに


 次世代パーソナルモビリティ実証実験コンセプト図
 詳細の実証実験の内容については6面参照


昨年12月24日、本田技研工業(株)熊本製作所(熊本県大津町)で行われた実証実験計画の発表会では、蒲島知事がプラグインハイブリッド車の実験車両を試乗



蒲島郁夫・Ikuo Kabashima

1965年熊本県立鹿本高等学校卒業後、地元農協に勤務。68年に農業研修生として渡米。74年米国ネブラスカ大学農学部卒業。79年米国ハーバード大学大学院修了（政治経済学博士）。筑波大学教授を経て、97年東京大学法学部教授に就任。2008年熊本県知事就任。主な著書は「政治参加」（東京大学出版会）、「戦後政治の軌跡」（岩波書店）、「政権交代と有権者の態度変容」（木鐸社）、「逆境の中にこそ夢がある」（講談社）など。

移動の喜びを追求するものです。しかも電動なので環境にも優しい。

蒲島 私が知事選の時に掲げた「4つの夢」の中の1つは「長寿を恐れない社会」をつくること。誰もが長寿になり、年老いて動けなくなることを、恐れている面があります。では、長寿を恐れなくてもいい社会をつくるには、どうしたらいいのか。そこで重要になるのは、社会参加を続けることだと思います。その意味で、移動手段を確保することは、まさに高齢者のクオリティ・オブ・ライフ（生活の質）の向上と直結しているのです。

伊東 私も生活の質向上そのものが、熊本での実証実験のテーマだと認識しています。「モンバル」から今後、電動二輪車、電気自動車、プラグインハイブリッド車で展開することで、次世代のパーソナルモビリティの包括的な可能性を探りたいと思っています。

蒲島 先日、プラグインハイブリッド車に試乗しましたが、あれほど静かで、乗り心地のいいクルマは初めてで感銘を受けました。これからの時代には環境対応型のモビリティが主流になっていくべきで、それをインフラも含め、利用者に不便を感じさせることなく、社会に浸透させていかないといけない。地方では公共交通が大都市圏ほど整備されていないがゆえに、クルマやバ

イクが、生活する上で重要な役割を果たします。今、少子高齢化で子どもの数が減り、熊本県でも学校の統廃合が進んでいます。子どもたちは遠距離通学をしなければならず、例えば矢部高校においては、自転車よりバイクで通学する生徒のほうが多くなっています。

伊東 実証実験の1つとして、高校で原付通学している生徒の方が電動二輪車「E V・neo」を利用されるとうかがっています。そこで原付から電動二輪車への転換の可能性についても検討していきたいと考えています。



実証実験計画の発表会には、熊本県立矢部高等学校の二輪車競技部の生徒も招待され、実験で使用する電動二輪車「EV-neo」に試乗した



持続可能なモビリティ社会をめざして

蒲島 本県では、環境問題への対応にも熱心に取り組んでいます。熊本は水保病という公害問題を抱えており、県民の環境問題への意識が非常に高い。それで、「環境立県くまもと」を宣言し、昨年4月には、低炭素社会の実現に向けた基本理念や、対策の方向性を示した「熊本県地球温暖化の防止に関する条例」を施行しました。この中では、温室効果ガスの排出削減に向けて、「事業活動・エコ通勤・建築物」を主なターゲットとする計画書制度を導入し、取り組みを進めています。

また、新たに策定した「産業振興ビジョン2011」では、特にソーラー関連の産業振興に力を入れることを明言しています。この点では、本県に薄膜太陽電池の開発・生産拠点である（株）ホンダソルテックがあり、相乗効果は大きいですね。本県ではこうした環境対応を、私たちの生活を制限する「制約」ではなく、新たな「ビジネスチャンス」ととらえています。ですから今回のプロジェクトでも、環境に良いというだけでなく、新たなビジネスの創造にもつ

なげていければと期待しています。

伊東 環境対応はメーカーにとって、ますます重要になっており、私たちも最大限の努力をして、製品の環境性能の向上に努めています。ただし忘れてはならないのは、環境性能と同時に、移動の喜びや楽しさを感じさせる製品でなければ、お客様に本当に喜んでいただけないということです。この2つのバランスを取りながら、最善の方法を探っていきたいと考えています。

蒲島 クルマの話でいうと、環境対応という点では、これからはやはり電気自動車がかギを握るのでしょうか。

伊東 確かに、最近では電気自動車が注目されがちですが、私はモビリティの電動化については当面、バイクやモンバルなど、小型のものに大きな可能性があると思っています。まだ電気自動車は1回の充電での走行距離に限界があり、今のガソリン車をそっくり代替できません。クルマのネクストステップということでは、すぐにオール電動化ではなく、まずはハイブリッド車を広く普及させていくことが、一番重要だと考えています。

一方、モビリティの電動化技術が進歩したことで、これまで需要が縮小していたバイクが、ここへきて逆にチャンスが出てきたと感じています。これらは小型であるがゆえに、走行距離が比較的短かく、ランニングコストも安い。こうした小型ゆえのメリットを再認識することで、これまでの既成概念にとらわれない新しいモビリティのあり方を世の中に提案していくことが、私たちに課せられた使命だと思います。

その際、私たちの強みは二輪、四輪から飛行機、船外機まで、さまざまな分野の製品を扱っていることです。こうした幅広いモビリティに精通していることで、さまざまな相乗効果を発揮でき、これからは異種のモビリティの組み合わせによって解決するということもあるでしょう。

交通安全のさらなる普及へ

蒲島 モビリティ社会ということでは、もう一つ重要になるのが交通安全の問題ですね。熊本はクルマ社会ですから、交通事故

削減は至上命令のようなものです。今年度で終了する第8次熊本県交通安全計画の目標については、一昨年に前倒しで達成することができました。昨年は交通事故死者数が78人と、57年ぶりに80人を下回り、6年連続で、死者数・負傷者数とも減少しています。

しかし、問題は高齢者（65歳以上）の死亡事故。昨年の死者数に占める高齢者の割合は約64%と過去最高で、本県の高齢化率が約25%であることと考えると、非常に大きな問題だと思っています。事故対策としては、まず高齢者の方々を守らなければいけないということで、関係機関や団体と連携しながら交通安全講習や啓発活動を展開しているところです。

伊東 私たちは、パーソナルモビリティを提供する企業として、お客様に「安全な製品をお渡しする」とともに「安全に運転するための知識や技術をお伝えする」ことで初めて安全な商品をお渡ししたといえると考えています。

この考えのもと昨年、「モンバル」の実証実験を始める際も、実験に協力していただいている高齢者施設の管理者や職員の方々を対象に、ホンダの交通安全教育センターのインストラクターがモンバルの指導者研修を実施しました。研修の参加者を通じて各々の施設でモンバルを利用する高齢者の方々に安全運転の指導をしていただきたいからです。先ほど申し上げた高校などでも、「EV・neo」の実証実験を行う際にも、利用する高校生に安全運転教育と一緒に提供したいと考えています。

モビリティの安全性がどんなに進化しても、運転するのは「人」であって、その使う「人」が安全でなければ、「移動する喜び」や「持続可能な社会」の実現など望め



研修を受けた高齢者施設の職員が「モンバル」を利用する高齢者に安全運転の指導を行っている

対談：モビリティ社会の未来像 — 環境と安全の観点からパーソナルモビリティの未来を考える

ない。だからこそ、製品の安全性を高めるだけでなく、モビリティを運転する「人」に焦点を当てた教育・啓発が重要であると考へ、さまざまな活動に取り組んでいます。こうした活動の拠点として、「交通安全教育センター」という施設を全国7カ所に設け、参加体験型の実践教育を行っています。ここ熊本にも「交通安全教育センターレインボー熊本」があります。私たちとしては、できるだけ多くの運転者に、危険を安全に体験していただくことにより事故防止にもつながると考えています。例えば、安全装備の1つにABS^{※1}がありますが、急ブレーキをかけた時、ABSがどのように作動するかなど、一度体験しておくのと、まったくしないのでは大違いだからです。



交通安全教育センターレインボー熊本では先進の施設を活用して、トップレベルのインストラクターが企業ドライバーや個人のお客様に安全運転のスキルとマインドを伝えている

一方、子どもや中学・高校生、高齢者への交通安全教育については栃木、埼玉、浜松、鈴鹿、熊本の各製作所内に「安全運転普及本部地区普及ブロック」を設け、地域社会と一体となって取り組んでいます。例えば、私たちが開発した「あやとりい^{※2}」という子どもを対象とした交通安全教育プログラムの指導方法などのノウハウを交通安全協会などの指導者の皆様にお伝えするなど、地域の交通安全活動のサポートを行っています。

蒲島 特に、交通ルールをよく理解していない子どもたちが交通事故で傷つくということ、社会全体で防がなければいけません。そうした交通安全教育に積極的に取り組んでいるホンダの活動は素晴らしいと思っています。本県でも「あやとりい」を大



熊本県では交通安全教育講習員の方々が「あやとりい」を活用して、子どもへの交通安全教育を行っている



伊東孝紳 • Takano Ito

1978年京都大学大学院工学研究科修了後、本田技研工業に入社。2000年本田技研工業取締役。本田技術研究所常務。03年本田技研工業常務を経て、05年同常務執行役員。07年同専務。09年本田技研工業社長、現在に至る。

いに活用させてもらっています。現場でも具体的にわかりやすいと好評で、本県では受講者がこれまでに4万人以上になると聞いています。

伊東 現場で直接指導にあたる方々には、本当に頭が下がります。「あやとりい」をはじめ、地域社会の皆様と一体となった「地区普及ブロック」の活動は熊本からスタートしました。まさに熊本から九州そして全国に広がっている取組みなのです。こうした行政・警察等との連携をもとに、交通安全の輪をさらに広げていきたいと思っています。

蒲島 熊本県民にはホンダに対する信頼もありますし、行政や地域の指導者もホンダ

逆境の中こそ夢がある

の取組みに共感しているのではないでしょう。交通安全の普及についても、今後も良きパートナーとして連携を深めたいと思っています。

蒲島 私のモットーは「逆境の中こそ夢がある」です。私の人生は若い頃から逆境の連続。家が貧しく、落ちこぼれたつたので、大学へ進学できませんでした。高校卒業後、地元の農協に勤めたものの、どうも自分は農協の仕事に向いていないと思うようになり、辞めてしまいました。しかし、そんな私も夢だけは持っていました。それは「阿蘇で牛を飼うこと」「政治家になること」「小説家になること」です。その夢の実現に向かって、農業研修生としてアメリカに渡りましたが、研修先の牧場で待っていたのは連日の重労働でした。そのような中、大学で学科研修があり、ここで学問に目覚め、もっと勉強がしたいと思うようになり、2年間の農業研修を終えて帰国後、再渡米してネブラスカ大学に留学し、畜産学の勉強をしましたが、卒業する際、もう1つの私の夢である「政治家になる」を見据えた勉強をやりたいたいと思ひ、ハーバード大学大学院で政治学の研究に打ち

込みました。帰国後は、筑波大学の教授を経て、東京大学の教授になりました。貧しい生活やアメリカでの農業研修での重労働は逆境でしたが、その中で夢を持ち続け、一歩踏み出したことで、自分にとっての新たなステップが開けてきたように思っています。60歳になった時に、熊本県知事選まで、あと2ヵ月半という時期に立候補を決めました。短期間での選挙でしたが、多くの県民の皆様の支持をいただくことができ、今に至っています。やはり苦しい状況に身を置くと、人間は鍛えられます。

伊東 私が社長になったのは、ちょうど世界同時不況の影響が出てきた頃で、逆境の真ただ中に飛び込んだといえるかもしれませんが、確かに不安はありましたが、逆に良かったと思うのは、苦しい時期だからこそ、何かを成し遂げなければいけないという、闘争心のようなものがわいてきたことです。あれがもし、順風満帆の時の社長交代だったら、逆に慎重になって、従来のやり方をなぞるだけだったかもしれません。逆境が人を鍛えるし、夢を育て、勇気を奮い起させるのだと思います。逆境を克服することをやれば、次世代に向けてのリーダーシップがとれる、あるいはお客様にもしろい製品を提供できると考えれば、やり甲斐のある時期だと思えます。

蒲島 知事に就任してからも、円高による

不況、口蹄疫や鳥インフルエンザの問題と、逆境は続いています。しかし、明かりも見えてきています。今年3月の九州新幹線全線開通、来年の熊本市の政令指定都市移行、熊本県にとっては大きなチャンスです。経済を上昇させることは県政にとって重要な課題です。熊本県では今後も成長が見込める分野を5つのフォレストとして設定しました。その中には、モビリティ関連分野もあり、この点においては実証実験などを通じてホンダと一緒に成長できる喜びを感じています。

こうした経済的な側面も重要な面ですが、文化・福祉・教育など、あらゆる面を含めた幸福量を最大化させること、つまり「県民の総幸福量の最大化」が、今の私の夢です。その先には、道州制になって九州が一体化した時に熊本を「州都」にするという大きな夢も持っています。そのためには、熊本の品格をもっと磨かなければいけない。そうした夢を県民の皆様と共有できるように、私をはじめ県庁の職員も一生懸命努力しています。

伊東 私は個人の移動の喜びは未来永遠にあると信じています。パーソナルモビリティは、持続可能な社会という観点からみると、ネガティブな要素としてとらえられがちであり、ある種の逆境の時代ともいえるかもしれません。しかし、そういう時代だからこそ、環境や安全をパーソナルモビリティの強みにし、リーダーシップをとることで、提供する私たちの喜びも最大化できるし、それが社会への貢献になるのです。私たちは、持続可能な社会の中で、個人が移動する喜び、楽しさを最大化するリーダーシップカンパニーでありたいと考えています。

※1 ABS (アンチロック・ブレーキ・システム) = すべりやすい路面状況等での急制動時に車輪のロックを防止するためのシステム。

※2 あやとりい = Hondaが鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。幼児向けの「あやとりいひよこ編」、小学3・4年生向けの「あやとりいひよこ編」、小学3・4年生向けの「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者向け「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしく とくあかし りかいして いただく」の略。詳細は下記ホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatori/

※3 5つのフォレスト (産業集積) = 熊本県では将来のリーディング産業群創出のため、「セミコンダクタ」「モビリティ」「クリーン」「フード&ライフ」「社会・システム」関連分野を重点成長5分野と設定。重点的な産業振興を行うとともに、産業分野の連携や融合を進め新たな技術革新を目指し、県外及び海外からの収入獲得に取り組んでいる。